



第47回

ごはん お米と わたし

作文・図画岩手県コンクール作品集



目次

ごあいさつ	1
JA岩手県中央会 代表理事会長 小野寺 敬作	
図画部門入賞作品	2
作文部門入賞作品	9
総評	16
審査委員長／元岩手大学教職大学院 特命教授 小岩 和彦	
図画部門を審査して	16
盛岡市立下橋中学校 指導教諭 佐々木 俊江	
作文部門を審査して	17
盛岡市教育委員会学校教育課 主任指導主事 山下 るり子	
コンクール入賞一覧	18
コンクール概要	22

図画・作文各部門

- 1部：小学校1～3年
- 2部：小学校4～6年
- 3部：中学校1～3年



いあいさつ

JA岩手県中央会

代表理事会長

小野寺

敬

作

第47回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、県内各地から作文172点、図画81点もの力作が寄せられました。ご応募いただきました小・中学生の皆さん、とても素晴らしい作品をありがとうございました。

そして、たくさんのお応募作品の中から見事に入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

また、全国コンクールにおいても、作文部門1点、図画部門2点が優秀賞に選ばれました。心からお祝いを申しあげます。

このコンクールは、次世代を担う小・中学生の皆さんに、日本の豊かな食卓と国土を作りあげてきたごはん・お米、そして稲作をはじめとする農業についての学びを深めてもらうため、JAグループが昭和51年から実施している取組みです。

これをきっかけに小・中学生の皆さんが、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。

皆さんから寄せられた作品を拝見いたしますと、米作り・稲作体験を通じた苦労や楽しみ、家族で食事を作る様子、ごはんをおいしそうに食べる姿、美しい田んぼの風景に心惹かれた気持ちなど、温かな家族の愛情や、稲作を大事に継承する郷土への愛着など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえていました。

次世代を担う皆さんの意識の高さに、あらためて目を見張るとともに、日本農業の将来やごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

この作品集をご覧いただく皆さまにおかれましても、子どもたちが全力で取り組んだ作品を通じて、ごはん・お米の大切さや農業の価値について、あらためてお考えいただければ幸いです。

「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールは来年度も実施を予定しております。皆さんの素晴らしい作品にまた出合えることを期待しております。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係する皆さま方のご支援とご協力に感謝申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。



ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞（全国コンクール）
いわてけんきょういく いんかいきょういくちょうしょう
岩手県教育委員会教育長賞

「妹のうれしい笑顔」

さとう あおい
佐藤 葵
もりおか しりつ おおみや ちゅうがっこう
盛岡市立大宮中学校 2年



ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞（全国コンクール）
いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「初めてのお弁当づくり～お父さんと一緒に～」

ちば こはる
千葉 心遥
いちのせき しりつ たきざわしょうがっこう
一関市立滝沢小学校 6年





いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ひがし にほん ふ ぎゅうふん か きょくちょうしょう
東日本普及文化局長賞

「田植え」
あ べ は なん
阿部花南
いちのせき し りつはないずみしょうがっこう ねん
一関市立花泉小学校 6年



じえいえいいわ て けん ご れん かいちょうしょう
JA岩手県五連会長賞

「おにぎりをにぎるお母さん」
お ばら みず き
小原瑞貴
きたかみ しりつ わ が ひがしちゅうがっこう ねん
北上市立和賀東中学校 3年





ゆうしゅうしょう
優秀賞

「おにぎりといもうと」

きく ち だい と
菊 池 大 杜

もりおか しりつむかいなか のしょうがっこう ねん
盛岡市立向中野小学校 1年



かぶしきがいしゃ にほんのうぎょうしんぶんとうほく し しょうしょう
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「おじいちゃんの田んぼ」

さ さ き ほの
佐々木 穂

はちまんたい しりつにし ね だいいちちゅうがっこう ねん
八幡平市立西根第一中学校 3年



ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞 (全国コンクール)
いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「米ニケーション」

あい ざわ かず き
相澤 一輝

みやこ しりつつ がいるいしちゅうがっこう
宮古市立津軽石中学校 1年



「いただきます。」

朝の始まりは、仙台のおばあちゃん直伝の通称ぼつばあちゃん卵焼きと、母お得意のちくわの照り煮。この最強コンビを目の前に、時計を気にしつつご飯を食べる手は止まらない。母の作るご飯は世界一。僕は絶対に残さないということを心に決めている。そう思うようになったのは小三の北海道に住んでいたあの日からだ。

二〇一八年九月六日。夜中に突然大きな揺れを感じた。北海道胆振東部地震だ。停電は四、五日続いた。食べるものはパンやお菓子。家の中は真つ暗だった為、避難所で数日過ごした。店に行っても、売られているのはパンや菓子類ばかり。パンが好きな僕でも、さすがに飽きてしまった。そんな時、母の友人が温かいおにぎりを作って、避難所に届けに来てくれた。真つ白でシンプルな塩おにぎり。しかし、その時の僕には、まるで光り輝くダイヤモンドのように見えた。久しぶりのお米に感動し、一粒一粒大事に食べた。僕は、あの時の一口目の味わいは一生忘れないだろう。

考えてみると今まで、店で売っている米を食べたことがないことに気付いた。親戚が米農家の為、その人から買ったたり頂いたりしているからだ。お中元、お歳暮と言えば米。僕の体はその米でできていると言っても過言ではない。親戚の熱い想いが込められたお米を毎日食べているからこそ、学校や部活動の野球を頑張ることができ。ありきたりな言葉だが、まさにパワーの源だ。

野球をしていると言えばかつこ良く聞こえるが、実は僕は素人だ。野球経験のある同級生には到底敵う訳がない。そこで僕は考えた。『米を食おう。』朝はパン食が好きだった小学校時代。中学生になつてからは給食の時間が十二時四十五分と少し遅くなったので、腹持ちの良いご飯に変えた。どうしてもパンが食べたい時は、おにぎりを追加することにした。野球の試合の合間には、栄養補助食品にお

にぎりを持っていくようにした。お米を食べるとやつぱりやる気がみなぎってくる。学校の先生も身体作りに協力してくれて、給食の時間に大きな鍋を持って来て、

「いっぱい食べて強くなるんだぞ。」

と言つては皿いっぱいにおかずやご飯をよそってくれる。先生の期待を背に受け、溢れんばかりの給食を一心不乱に食べる自分がかかしくもあり、嫌いではない。この作文を書いている今も、父特製チャーハンを「ウーバーイーツ」と称し、二階の部屋に届けてくれた。岩手が誇る南部鉄器製中華鍋で作るチャーハン。栄養満点、愛情たっぷり。僕の大好物だ。

親戚、先生、家族、たくさんの人達に支えられて中学校生活に全力投球できている今、ありがたさを身に沁みて感じている。一杯のご飯から伝わるたくさんさんの思い。愛が、夢が、未来が、茶碗の中いっぱい詰まって岩手山の如く山盛りになっているのだ。食事中に繰り広げられるたわいもない会話や笑顔も、全てご飯を通じて温かいものとなるから不思議だ。米と人との共存、これこそ『米ニケーション』と言えるのではないだろうか。自然豊かなここ岩手。登下校中の自転車から見える緑いつばいな眺め、海からの心地よい風、ほんのり香る潮の匂い、津軽石川の優しい流れ。この景色、匂い、音、全てを全身で感じ、今日も勉学に部活動に励んでいる。

汗びつしよりで帰宅すると、食卓に並ぶ美味しそうな夕ご飯。お隣さんから頂いた魚をサクサクのフライに。妹が夏休みの観察で育てた真つ赤なミニトマト。それを弟が今か今かと狙いを定めている。国語の授業で音読を褒められたこと、部活動でフライの球を上手にキャッチできたこと、口を動かし箸を動かしお腹いっぱい。

そして今日も美味しいご飯に感謝を込めて

『ごちそうさまでした。』

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「弟1さいのたん生日」

こ がねもり つむ ぎ
小金森 紬 生

いちのせき し りつはないずみしょうがっこう
一関市立花泉小学校 3年



「お米の神様」 佐藤 汐夏

きたかみ しりつ え づ り こ し ょ う が っ こ う ね ん
北上市立江釣子小学校 6年



「汐夏、もったいねえぞ。米一粒には、八十八人の神様がいるんだ。ありがたあく最後までちょうだいするもんだよ。」これは、ぼくが五才頃のこと、ご飯を残そうとしたぼくに、おじいちゃんが言った言葉です。

ぼくが初めて米作りの体験をしたのは、小学校一年生の時です。おじいちゃんとおばあちゃんと兄とぼくとの四人で、田植えをしました。機械で植えた後の田んぼのすみに、手で苗を植えるのです。はだして田んぼに入り、おじいちゃんに教えられた通り、一直線に苗を植えていきました。土はやわらかく、スツと苗が入ります。かんたん、かんたんと思いつながら、夢中になってどんどん進みました。ところが終わって後ろをふり返ってみると、カーブあり、ジグザクありで自分でもがっかりしました。でも、おじいちゃんは大笑いした後、

「気にすんな。そのうちうまくなる。」と、優しく言ってくれました。

二年生の時には、トラクターに乗りました。おじいちゃんのものの上に乗せてもらい、ハンドルをいっしょに持ちました。おじいちゃんがちよつと手を離すと、とたんにトラクターがあばれだしました。体にガタガタと感じた振動を今でも覚えています。

三年生は、再び手作業での田植えをしました。ぼくもだんだんコツをつかんできていたので、調子よくまっすぐに

植えることができるようになりました。みんなで作業した後は、大好物のオレンジジュースで「おつかれさま」の乾杯です。自分で植えた苗を見ながら、あぜ道にすわって飲んだオレンジジュースは、最高の味でした。

次の年も作業を楽しみにしていましたが、おじいちゃんの腎臓が悪くなり、できなくなりました。ぼくの家の田んぼは、他の人の手に渡りました。「もう、おじいちゃんといっしょに田植えができなくなってしまうんだ。」と思うと、とてもシヨックでした。でも、おじいちゃんはずっとつかったにちがいありません。

去年、総合的な学習の時間に田植えをしました。おじいちゃんに話したら、

「そうか、そうか、よかったな。」と笑顔で喜んでくれました。稲刈りの時は、おじいちゃん直伝の鎌の使い方、ザクツ、ザクツとうまく刈ることができました。

ぼくは、季節ごとに変わる江釣子の田んぼの風景が大好きです。泥に入った手や足の感覚、トラクターやコンバインの調子のよいエンジン音、作業や収かくの後の気持ちよさ。どれもぼくの心の中にある、忘れたくないものばかりです。だから、ぼくは農業をやりたいと思っています。神様がたくさんいるありがたいお米をおじいちゃんに食べさせて、うんと長生きしてもらおうと思います。

「会えなくなった一粒」 山田 結心

い わ て だ い が く き ゃ う い く が く ぶ ぞ く ち ょ う が っ こ う ね ん
岩手大学教育学部附属中学校 1年



いつものスーパーに行く。スーパーには様々な県産の様々な品種の米が売られている。

「今日はどのお米にしようか？」

母と色々見ながら買うお米を選ぶ――。

それには理由があった。

私の父方の祖父は米農家だった。私が離乳食で初めて食べたお米のお粥も、祖父の米から作ったものだ。

春には種蒔き、秋には収穫をする。祖母はその間に野菜を育て、春は木に穴をあけ、なめこの菌をトンカチで植えた。祖母は遊びに行く度に、五キロの米袋に入った米をくれた。我が家は毎日、祖父の作った米が主食だった。

「じじが頑張つて作った米だから残さず食べてくれると嬉しいな。」祖母がいつも言っていた。妹や弟の離乳食の時は祖父が自ら離乳食をあげ嬉しそうに

「うまいか？」

と聞いていた姿を思い出す。

月日が流れ、父と母は離婚した。しかし祖父母とは連絡を取り合っていたので、祖母の作った野菜が出来ると一緒に米を送ってくれ、弟がアレルギーで給食ではないと分かると、その米の量が五キロから十キロに増えた。配送の人が

「重いですよ。」

という位、重く、段ボールにぎゅうぎゅうに詰めて送ってくれた。

コロナ禍になり、祖父母とはなかなか会えなくなった。そんな中で、弟のランドセルを買う約束をしているから、と待ち合わせをして祖父母と会った。ランドセルを背負った弟と祖父母の写真をたくさん撮っていた。

その日からしばらくして、米十キロと野菜やお菓子が届いた。

「はるちゃん一年生がんばれ」と祖父の字で手紙が入っていた。

それが最後の祖父の米となった。

一月、私は周りには言わず中学受験をし、合格したので、姉が行った学区の学校には行かない事を電話で報告した。その時祖母が「じじ、一昨日救急車で運ばれてよ、入院してるから、ちゃんと報告しとくからな。頑張れ。じじは心配ないから。」

ちよつと秋田なまりの入った祖母の声に、

「わかった。」

と答えた。それから二ヶ月後、祖父は亡くなった。私の卒業式が近かったので、私がそれを聞いたのは四月の入学式を終えてからだつた。

生涯をかけて米作りをした祖父。祖父の米が特Aランクをもらつた時は、自分の事のように嬉しかった。秋に遊びに行くとき弟をコンバインに乗せてくれたり、ご飯を作ってくれたりした。春の種蒔き、秋の収穫時には朝から出て行き、帰るのは日が暮れる頃だった。

持病があつた祖父は、初孫である姉の成人式まで生きたい、と言っていた。でもそれは叶わなかった。

祖父が入院したと聞いた時、私の家族は初めてスーパーで米を買つた。祖父の米を残しておいた。

味が全然ちがうな。

色々な品種の米を買ってみたが、どれも祖父の米とは味、食感がちがった。

私が中学校に入学し、初めてお弁当を持って行く日、久しぶりに祖父の米を炊いた。

お昼にその弁当を食べた時、祖父の作った米の味、香りが口の中に広がり、鼻を抜け、私は祖父が亡くなって初めて涙が流れた。

「じじ、美味しいよ。私の制服姿見てほしかったよ。」

心の中で呟いた。心もお腹も満たされた。

今日もスーパーで、どの米を買おうか母と時間をかけて選ぶ。少しでも祖父の作った米の味に似ているものを探して..

祖父の米は世界一。似た米は見つからない。

「記録的冷夏と今」

あし かや ひな た
芦 萱 陽 菜

いちのせき しりつまいかわしやうがっこう ねん
一関市立舞川小学校 6年



今は、じゅうぶんにお米が食べられる日本の世の中だが、母に聞くと昔、記録的な冷夏となり、深刻な米不足となった事があるらしい。その事が気になり、調べてみる事にした。

一九九三年、全国作きよう指数七十四、青森県二十八（下北半島についてはゼロ）、岩手県三十、宮城県三十七、北海道四十、九州は七十台。いつもは百前後をテレビで見ているが、ほとんど収かくできない大変な事態だったとわかる。

それまで米の輸入に厳しくしていた政府が、二百五十九万トンの米をタイ、中国、米国からきん急に輸入する事を決めた。

人は物不足を聞くと、何でも買いしめる本能が働くのか、日本の米は店で手に入らなくなった。コロナが流行したころのマスク不足といっしょだと思った。

当時安い価格だったタイ米を祖母はこう入した。形は細長く、食感はポソポソしていて、少し臭みもあり、口に合わず、ほとんど処分してしまったそうだ。一生けん命作ってくれた農家さんにはとても申し訳ない話だ。

よく年になると、米不足・外国米そう動は落ち着いたら。沖縄県の早場米が少しづつ出回りはじめたからだ。寒さに弱いササニシキから品種改良され、ひとめばれ、コシヒカリが出てきたのも安定した理由だ。

沖縄の人には、たくさん救われた。種もみ不足を解消するため、石がき島で後の「かけはし」になる「岩手三十四

号」という、たい冷性の高い種もみ二トンも育苗してもらった。二ヶ月早い三月に田植えをし、五月には百十六トンの種もみを収かくした。その種もみで、岩手県の多くの人は田植えが出来たようだ。

海外に比べれば、日本の面積はせまいが、季節の時期が少しずれていて、気温差があるからこそ助けてもらえて良かったと思った。

昔に比べると気候変動が激しくなっている。今度は沖縄の人を助ける時が来るかもしれない。その時は思いやりの気持ちを忘れないで恩返し出来たらいいと思う。

冷害の時には助けられた外国米だったが、今も毎年七十七万トンも輸入している。それがせんべい、酒、調味料になっている。日本の米が余っている中で輸入し続ける理由は、関税があっても日本米より安い価格の外国米の方が製品を販売する上で、きぎようは助かるからなのだろうか。

戦争や災害が起これば、食料自給率や輸出入の内容を改めて考えるけれど、何事もなくふつうに毎日過ごしていると、誰も考えようとしな。美味しい日本米が無くならないように、生産者だけではなく消費者もふくめて多くの人が、米の価格が下がらず、むだなくお米を消費できるように解決策を考えるべきだ。

大好きな日本米がいつまでも食べられて、いつまでも続くように。

「きゅうきよくのごちそう」

あ だち こ はく
足 立 琥 珀

きたかみ しりつくろさわじりにししやうがっこう ねん
北上市立黒沢尻西小学校 3年



新がたコロナウイルスとのたたかいが、もう三年になる。ぼくが、ようち園をそつ園するところから、だんだんと感せん者がふえてきて当たり前にできたことが、そうではなくなってしまう生活がつづいている。

新がたコロナウイルスがはやる前、たん生日や何かがんばった事があるとままやばがごはんやさんにつれていってくれて、おいしいごはんを食べていたけれどマスクをはずして、外でごはんを食べることがむずかしくなってしまうた今、ぼくにとつてきゅうきよくのごちそうになつているものがある。

それは、足立家とくせい手まきずし。みんなの家は、マクロやえび、いかなど海のものを使つての手まきずしがふつうだと思ふけれど、ぼくの家は、おばあちゃんからままが教えてもらった手まきずし。子どもがうれしい、おかわりしちゃうわくわく手まきずし。やき肉、あまいうすやきたまご、ツナ、ウインナー、なつ豆、それにちよつぱりすつ

ぱいけれど、あまみもあるすめし、そしてパリパリのり。これで、手まきずしをする。

「あついで、うちわであおいで。」

と、お手つだいをおねがいされて、弟といっしょにいっしうけんめいうちわであおいで。はやく食べたいけれど、すめしは、さめていた方がおいしい。

「できた？」

ままのチェックが入つてオツケーが出ると、じゅんぴかいし。全ぶのぐを食べたくてなやんでしまう。たくさん用意したごはんがなくなつてぼくのおなかはどうどんふくらむ。大まんぞくだ。けれど米つぶは、一つぶものこしてはいけない。作っている人たちの思いをすべていただいているからとぼくは、教えてもらっている。

家ぞくみんなで楽しい話をして、大すきな時間をすごす事ができてぼくは、しあわせだ。

「大丈夫？」
新田眞丸
北上市立東陵中学校 1年



「本当にこのままでいいのかな？」
あまりの早さに驚いてしまった。

田園風景が続く僕の大好きな長い一本道、その道の入口付近は、一年足らずで何十棟もの家が立ち並び、造成もどんどん進められていて、まるで一つの新しい町が出来た様だ。

美しい田園風景が無くなっていく事が、ただ単に、寂しいとか悲しいという事よりも、あつという間に、数ヘクタールもの農地が消えていくというこの現実に驚き、少し不安さをも感じた。確かに、今、農家の後継者不足で農業を継ぐ人が減少し、米の消費量も年々落ち込んでいるという事ぐらひは僕でも知っている。

だから、荒廃した田んぼを利用し、新しい町並みを作って、人口を増やし活気ある町づくりをする事も納得は出来る。

だが一方で、
「本当にこのままでいいのかな」という思いも残る。

なぜなら、近年、温暖化による干ばつや、熱波による山火事など、世界中あちこちで大きな被害が出ている。それにくわえ、思いもよらなかった戦争まで起きてしまった。このまさかの戦争で、最大生産地であるウクライナの小麦が輸出できないでいる。パンを主食としている欧州やアフリカの人達にとっては死活問題だ。日本でも、食品の値段が高騰し、困っている人が多い。今まではごく普通に、必要な物は貿易で世界の至る所から輸入し、生活を豊かにしてきたが、災害や国と国との間にまさつが生じれば、簡単に物流がストップしてしまうという事を今回学んだ。

不安定な時代に入った今、農地を転用するのではなく、農地を残して活用する方法を考えた方がいいのではないかと思った。農地は食料確保の為に必要不可欠だから。

僕が四年生の頃だったか、どの家でも田植えが終わり、植えたばかりの小さな苗が、田んぼの中から顔を出しているような、そんな風景を祖父と眺めながら、田んぼの水を見に行った時、

「おかわり。」

きょうも、ごはんがおいしくて、ぼくも、おかわりをします。白いごはんだけでも、三ばいはいたべられるぐらい、ぼくは、白いごはんが大好きです。

とくに、カレーライスときは、じぶんでごはんを大もりでおかわりをします。ちょうしにのつていっぱいおかわりをして、のこすときもあります。そんなときは、おかあさんにおこられます。

ぼくは、やきゅうをやっています。れんしゅうじあいや大会があるときは、おにぎりをもつていきます。ぼくが、とくにすきなおにぎりは、からあげおにぎりです。たれがついたからあげをおにぎりにすると、あつい夏でもなんこでもたべられます。このおにぎりのおかげで、やきゅうがますますたのしくなります。

ごはんは、どんなときでもおいしいし、ぼくに力をくれ

ます。ぼくは、ごはんがおいしいりゆうを考えてみました。

ぼくが、まい日たべているお米は、おじいちゃんがつくっているお米です。おじいちゃんがつくるお米は、とてもおいしいです。

ぼくは、おじいちゃんのお米づくりの手つだいをしたことがあります。とてもしごとがたいへんで、お米には、おじいちゃんの気もちがいっぱいはいつているんだとわかりました。だからごはんはおいしいのだとわかりました。そしてぼくは、ごはんをのこさずたべようと、思いました。

友だちにもものこさずたべてほしいので、

「きゅうしよくのごはんをきれいにたべてください。」

と、かえりの会でよびかけました。すると、きれいにたべてくれる人がふえて、うれしくなりました。みんなでおいしくたべて、お米の力でたのしく元気にすごしたいです。

祖父が、

「日本が唯一、自給自足出来る物は何だと思う？」

と急に質問してきた時の事を思い出した。

その時は知らなかったのと、考えるのがめんどろだったので、「分からない」

と答えた。正解は「米」だった。

その時は、特別に難しい答えでもなく、おどろくような答えでもなかったたので、僕の「ふーん、そうなんだ」

のそつけない一言で終わつたのを覚えている。

今思うと、祖父との会話はいつも短いのだが、なぜか、田んぼでの会話は少し真面目な話しになる事が多かった。

先日何の話題からだったか、平成五年の大冷害の話になった。

東北・北海道は冷夏による大冷害、九州地方では台風が上陸、大雨による被害と、その年は、全国の作況指数も低く、東北地方では五、六〇位、特に岩手県の作況指数は最も低く三〇位の大凶作となったそうだ。

都会では、米を買い求めスーパーに並ぶ姿がテレビに映し出されていたという。

当時、日本としての備蓄米もあつたそうだが不足になり、タイ産や、カリフォルニア産など外国産の輸入米に助けられたそうだ。

この時も、日本に米が無くなるなどとは誰も考えつかなかったと思う。

「災害は忘れた頃にやってくる」というが平成の米騒動から今年で二十九年、又、日本に米が無いと慌てない為にも、無駄とは思わずに、備蓄米を十分に確保出来たらと思つた。

祖父が子供の為に始めた稲作。今は僕達孫にとつても、いつも米が身近にある事に感謝。『農地を守る事は命を守る事』だと感じた。

「ごはん、大すき」
山根駿寿
一関市立山目小学校 2年



「おかわり。」

きょうも、ごはんがおいしくて、ぼくも、おかわりをします。白いごはんだけでも、三ばいはいたべられるぐらい、ぼくは、白いごはんが大好きです。

とくに、カレーライスときは、じぶんでごはんを大もりでおかわりをします。ちょうしにのつていっぱいおかわりをして、のこすときもあります。そんなときは、おかあさんにおこられます。

ぼくは、やきゅうをやっています。れんしゅうじあいや大会があるときは、おにぎりをもつていきます。ぼくが、とくにすきなおにぎりは、からあげおにぎりです。たれがついたからあげをおにぎりにすると、あつい夏でもなんこでもたべられます。このおにぎりのおかげで、やきゅうがますますたのしくなります。

ごはんは、どんなときでもおいしいし、ぼくに力をくれ

ます。ぼくは、ごはんがおいしいりゆうを考えてみました。

ぼくが、まい日たべているお米は、おじいちゃんがつくっているお米です。おじいちゃんがつくるお米は、とてもおいしいです。

ぼくは、おじいちゃんのお米づくりの手つだいをしたことがあります。とてもしごとがたいへんで、お米には、おじいちゃんの気もちがいっぱいはいつているんだとわかりました。だからごはんはおいしいのだとわかりました。そしてぼくは、ごはんをのこさずたべようと、思いました。

友だちにもものこさずたべてほしいので、

「きゅうしよくのごはんをきれいにたべてください。」

と、かえりの会でよびかけました。すると、きれいにたべてくれる人がふえて、うれしくなりました。みんなでおいしくたべて、お米の力でたのしく元気にすごしたいです。

祖父が、

「日本が唯一、自給自足出来る物は何だと思う？」

と急に質問してきた時の事を思い出した。

その時は知らなかったのと、考えるのがめんどろだったので、「分からない」

と答えた。正解は「米」だった。

その時は、特別に難しい答えでもなく、おどろくような答えでもなかったたので、僕の「ふーん、そうなんだ」

のそつけない一言で終わつたのを覚えている。

今思うと、祖父との会話はいつも短いのだが、なぜか、田んぼでの会話は少し真面目な話しになる事が多かった。

先日何の話題からだったか、平成五年の大冷害の話になった。

東北・北海道は冷夏による大冷害、九州地方では台風が上陸、大雨による被害と、その年は、全国の作況指数も低く、東北地方では五、六〇位、特に岩手県の作況指数は最も低く三〇位の大凶作となったそうだ。

都会では、米を買い求めスーパーに並ぶ姿がテレビに映し出されていたという。

当時、日本としての備蓄米もあつたそうだが不足になり、タイ産や、カリフォルニア産など外国産の輸入米に助けられたそうだ。

この時も、日本に米が無くなるなどとは誰も考えつかなかったと思う。

「災害は忘れた頃にやってくる」というが平成の米騒動から今年で二十九年、又、日本に米が無いと慌てない為にも、無駄とは思わずに、備蓄米を十分に確保出来たらと思つた。

祖父が子供の為に始めた稲作。今は僕達孫にとつても、いつも米が身近にある事に感謝。『農地を守る事は命を守る事』だと感じた。

総評

審査委員長



元岩手大学教職大学院
特命教授
小岩和彦

第47回「ごはん・お米とわたし」作文・図画岩手県コンクールが、コロナ禍にもかかわらず主催者および関係各位の皆様方のご尽力により今年も無事開催されたことに感謝申し上げます。ありがとうございます。

今回のコンクールには、作文の部に172点、図画の部には81点、合計253点というたくさん応募がありました。そして、県代表として出品した全国コンクールでは、作文の部で1点、図画の部で2点の優秀賞を受賞することができ、あらためて岩手の子どもの作品のレベルの高さを感じることができました。

本コンクールには、作文の部・図画の部の2つの部門がありますが、どちらの部門にも共通していた素晴らしいことがあったように思います。それは、他の人の真似ではなく、自分の身の回りのことに目を向け自分の感性を大事にして作品を作り上げていたということです。

作文の部では、お米を通じた家族との触れ合いや大切な人への思い、感謝の気持ちなどが自分の言葉で素直に表現されていましたし、文章構成なども工夫されているなあと感じました。図画の部では、家族と一緒に初めてお弁当を作っている様子、おいし

そうにごはんを食べている様子などが丁寧に描かれていました。表情もとても豊かで、家族のほのぼのとした感じがとてもよく伝わってきました。

作品を作り上げていく上で技術的な面を磨くということも勿論必要ですが、それ以上に大切なことは、自分が伝えたいと思うことを自分なりに素直に表現することではないかと考えます。どこから借りてきた言葉ではなく、自分の感性で感じ取ったことをそのまま表現することが大切だと思います。そのことが、作品を読む人に見る人に伝わった時に大きな感動を与えるのではないのでしょうか。

児童生徒の皆さんには、これからも自分の身の回りの出来事に対して敏感に感じ取る気持ちを持ち続けながら、さらに自分なりの素晴らしい作品を作り上げていつてほしいと思います。来年もたくさん作品が寄せられることを期待しています。

最後に、今回審査員として児童生徒の皆さんの素晴らしい作品に触れる機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

図画部門を審査して



盛岡市立下橋中学校
指導教諭
佐々木 俊江

図画作品の審査を通して、子供たちの澄んだ心や豊かな感性を感じることができ、幸せな気持ちになりました。今回は、昨年度よりも小学生の作品の応募数が減ってしまい残念でしたが、全国審査において小学校一点、中学校一点が優秀賞に選ばれるな

じます。

岩手県知事賞を受賞した相澤一輝さん（宮古市立津軽石中学校1年）の「米2ヶーション」は、被災を塩おにぎりで乗り越えたこと、食事におにぎりを追加して野球の上達を目指していること、そしてその「お米」が家族を繋いでいることを改めて認識し感謝する、という前向きで誠実な内容をユーモア溢れる表現でまとめています。読後に爽快感を味わえる秀逸な作品です。

岩手県教育委員会教育長賞を受賞した山田結心さん（岩手大学附属中学校1年）の「会えなくなつた一粒」は、効果的な構成と表現で祖父への思いが丁寧に綴られており、読み手に深い感動を与えます。会えなくなつても「お米」で繋がっていることが支えであることをお弁当の味で噛み締めた結心さん。頬を伝う涙は、祖父への感謝と新しい道を歩む決意が溢れたものだったのでしよう。

JA岩手県五連会長賞を受賞した佐藤汐夏さん（北上市立江釣子小学校6年）の「お米の神様」は、祖父と分かち合った稲作の喜びが効果的に回想されており、書き出しから引き込まれる作品です。将来は農業に携わり、神が宿る米で祖父に長生きしてもらうと綴る汐夏さんの強い思いに胸打たれます。

家の光協会東日本普及文化局長賞を受賞した足立琥珀さん（北上市立黒沢尻西小学校3年）の「きゅうきよくのごちそう」は、足立家特製手巻き寿司を誇らしげに紹介する、子供らしい前向きさと幸福感に溢れる作品です。読み手も琥珀さんと幸せを共有できる、それがこの作品の魅力です。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した芦萱陽菜さん（一関市立舞川小学校6年）の「記録的冷夏と今」は、輸入米と日本米について考えたことが明確にな

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会
学校教育課 主任指導主事
山下 るり子

今年度も多くの児童生徒の皆さんから応募をいただきました。どの作品も自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感

ど、優れた作品がたくさんありました。また、ご家族や学校のご協力にも感謝したいと思います。そして、感性豊かな作品ばかりで審査は大変難しかったことを申し添えます。

全国審査優秀賞並びに岩手県知事賞を受賞した千葉心遥さん（一関市立滝沢小学校6年）は、昨年度に引き続き県知事賞を受賞しています。「初めてのお弁当づくり」お父さんと一緒に「」の作品は、場面設定がよく練られています。さらに、お父さんや登場する自分の豊かな表情が優れた描写力で描かれていて、お米を通して温かな心が通う親子の様子が伝わってくる素晴らしい作品です。

全国審査優秀賞並びに岩手県教育委員会教育長賞を受賞した佐藤葵さん（盛岡市立大宮中学校2年）の「妹のおいしい笑顔」は、おいしそうにごはんを食べる妹さんに対して、愛情をもつて描いた様子が伝わってくる素晴らしい作品です。器を持つ手や木の器の様子が優れた描写力で描かれています。

JA岩手県五連会長賞を受賞した小原瑞貴さん（北上市立和賀東中学校3年）の「おにぎりをにぎるお母さん」は、白いお米と黒い海苔のおいしそうなおにぎりが画面で映えるように、構図や配色にたくさん工夫がなされている素晴らしい作品です。朱色や緑色を効果的に使っているところがみごとです。

家の光協会東日本普及文化局長賞を受賞した阿部花南さん（一関市立花泉小学校6年）の「田植え」は、水彩絵の具の効果を上手に生かし、優しい色合いで田んぼの美しい風景を描いた素晴らしい作品です。田んぼの奥行き表現も優れています。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した佐々木穂さん（八幡平市立西根第一中学校3年）の「おじいちゃん

るよう文章が構成されています。米の消費について考える必要性を主張する、説得力のある作品です。

優秀賞を受賞した山根駿寿さん（一関市立山目小学校2年）の「ごはん、大すき」は、好きな理由を力説しているところ、みんなにも残さず食べてほしいと帰りの会で呼びかけているところに好感がもてます。駿寿さんの本気度が微笑ましい作品です。

同じく優秀賞を受賞した新田眞丸さん（北上市立東陵中学校1年）の「大丈夫？」は、荒廃した農地の土地開発を進める大人たちに警鐘を鳴らす作品と言えます。不安定な時代だからこそ効果的な農地の活用法を考えるべきという主張に頼もしさを感じます。

学校奨励賞は、二戸市立福岡中学校です。全校的な取組を展開し、生活と「ごはん・お米」との関わりについて考えを深める有意義な時間を多くの生徒で共有していることが高く評価されました。

入賞作品は勿論のこと多くの応募作品から、お米への感謝の気持ち、家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着が伝わってきました。今後も子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしていただくことを期待して、選評といたします。

全国コンクール

優秀賞

千葉 心 遙

一関市立滝沢小学校

6年

「初めてのお弁当づくり〜お父さんと一緒に〜」

優秀賞

佐藤 葵

盛岡市立大宮中学校

2年

「妹のうれしい笑顔」

岩手県コンクール

岩手県知事賞

千葉 心 遙

一関市立滝沢小学校

6年

「初めてのお弁当づくり〜お父さんと一緒に〜」

岩手県教育委員会教育長賞

佐藤 葵

盛岡市立大宮中学校

2年

「妹のうれしい笑顔」

JA岩手県五連会長賞

小原 瑞 貴

北上市立和賀東中学校

3年

「おにぎりをはにぎるお母さん」

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局長賞

阿部 花 南

一関市立花泉小学校

6年

「田植え」

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

佐々木 穂

八幡平市立西根第一中学校

3年

「おじいちゃんの田んぼ」

優秀賞

菊池 大 杜

盛岡市立向中野小学校

1年

「おにぎりといもうと」

小金森 紬 生

一関市立花泉小学校

3年

「弟1さいのたん生日」

学校奨励賞

一関市立金沢小学校

佳作

1部

林 大雅 一関小

3年 「お米ができるまで」

玉澤璃知佳 藤沢小

3年 「主役はごはん」

小野寺太寿 千厩小

2年 「おいしい ごはん」

堺 俐央那 山目小

2年 「朝ごはんをたべたよ」

佐々木そら 若柳小

1年 「おにぎりをたべるわたし」

井上 万葉 平舘小

2年 「ごはんとお米」

小原 歩夢 若柳小

2年 「おにぎり おいしいな」

2部

櫻田 真尋 北厨川小

5年 「花より おにぎり」

金田 悠希 金沢小

5年 「ドキドキのトラクター」

牛崎 奏 江釣子小

4年 「おじいちゃん、おばあちゃん
おいしいお米ありがとう！」

清水 心深 福岡小

4年 「秋のめぐみに感謝」

3部

中島 紗希 下橋中

1年 「最高！レースの後の
パワフルおにぎり」

村木舞璃華 西根第一中

3年 「おいしいご飯」

伊東 鈴菜 興田中

1年 「みんなでおにぎり作ろう」

石原 唯生 下橋中

1年 「家族でつくる
おいしいおにぎり」

千葉 夏葵 萩荘中

2年 「お米とわたし」

曾原 結 遠野東中

1年 「幸せつまった一握り」

全国コンクール

優秀賞

相澤 一輝 宮古市立津軽石中学校 1年 「米ニケーション」

岩手県コンクール

岩手県知事賞

相澤 一輝 宮古市立津軽石中学校 1年 「米ニケーション」

岩手県教育委員会教育長賞

山田 結心 岩手大学教育学部附属中学校 1年 「会えなくなった一粒」

JA岩手県五連会長賞

佐藤 汐夏 北上市立江釣子小学校 6年 「お米の神様」

一般社団法人家の光協会東日本普及文化局長賞

足立 琥珀 北上市立黒沢尻西小学校 3年 「きゅうきよくのごちそう」

株式会社日本農業新聞東北支所長賞

芦 萱陽菜 一関市立舞川小学校 6年 「記録的冷夏と今」

優秀賞

山根 駿寿 一関市立山目小学校 2年 「ごはん、大すき」

新田 眞丸 北上市立東陵中学校 1年 「大丈夫？」

学校奨励賞

二戸市立福岡中学校

佳作

1部

玉澤璃知佳 藤沢小 3年 「日本のお米」

工藤ひまり 木細工小 1年 「ごはんはおいしいね」

佐藤 美希 南城小 2年 「おばあちゃん、おいしいカレーありがとう」

3部

玉澤歩風乃 一関第一高等 1年 「おにぎりの歴史に迫る」

学校附属中

菊池 梨花 木細工小 3年 「ごはんのふしぎ」

下堀 陸男 福岡中 1年 「お米とわたし」

菊池 咲心 木細工小 3年 「おもち」

八ッ役絃香 一戸中 1年 「米からつくる笑顔」

千葉 諒太 一関小 1年 「おじいちゃんたんぼ」

2部

坂本 幸帆 城東中 2年 「米は主食の王様」

伊藤成太朗 江釣子小 4年 「大好物はみそおにぎり」

山下 夏海 大船渡市立 3年 「米づくりがつなぐもの」

齊藤 奈穂 湯口小 5年 「お米がわたしに

第一中

佐々木萌衣 花泉中 2年 「朝食にはごはんかパンか」

及川 瑛心 江釣子小 4年 「お米、ひとつぶも」

高橋 晴一 江釣子小 4年 「お米大好き」

第47回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画岩手県コンクールの概要

応募点数

学 校	作 文	図 画	合 計
小学校	25	66	91
中学校	147	15	162
計	172	81	253

応募締切日

令和4年9月2日(金)

第1次審査会

令和4年10月14日(金)

第2次審査会

令和4年12月8日(木)

主 催

岩手県内 J A ・ J A 岩手県中央会

後 援

岩手県(農林水産部県産米戦略室)・岩手県教育委員会
いわてのお米ブランド化生産販売戦略推進協議会
一般社団法人家の光協会東日本普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所
J A 岩手県信連・J A 岩手県厚生連・J A 全農いわて・J A 共済連岩手

審査員(敬称略)

審査委員長	小 岩 和 彦	元岩手大学教職大学院 特命教授
専門審査委員	佐々木 俊 江	盛岡市立下橋中学校 指導教諭
専門審査委員	山 下 るり子	盛岡市教育委員会学校教育課主任指導主事
審 査 委 員	佐 藤 実	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審 査 委 員	市 沢 喜 雄	(一社)家の光協会東日本普及文化局局長
審 査 委 員	前 田 大 介	(株)日本農業新聞東北支所次長
審 査 委 員	荒木田 裕 樹	J A 岩手県信連代表理事専務
審 査 委 員	藤 尾 芳 彦	J A 岩手県厚生連常務理事
審 査 委 員	林 伸 彦	J A 全農いわて県副本部長
審 査 委 員	坂 本 昇	J A 共済連岩手県副本部長兼管理部長
審 査 委 員	後 藤 元 夫	J A 岩手県中央会副会長理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

J A 岩手県中央会 J A 支援部[組織広報班] 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページ <https://ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp



国消
—こくしょうこくさん—
国産



「国消国産」とは、国民が必要とし消費する食料は、できるだけその国で生産するという考え方。JAグループ独自のキーメッセージです。